せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 ☎42-2590
第146号・平成13年11月1日

年表で読む 古平の歴史

【53】

道路と交通

■アイヌの道「ルー」

アイヌの人たちも、互いの行き来をするのに当然道路は必要でしたが、わざわざ道路を作るようなことはしないで、自然に出来たけもの道を通ったり、川伝えに歩いていました。

アイヌ語では川のことをルーと言い、ルオクシュナイ（六志内）というのは「路を流れる川」の意味だといわれ、神恵内へ通じる踏み分け道（人が歩いているうちに自然に出来た道）だったと考えられます。

明治になっても、現在の港町を通る道路のかなりの部分は山側の崖を崩して作った道路で、波の穏やかなときには海岸伝えに人が歩いていたといいます。

日本海沿岸は地形が険しく、特に雷電・積丹半島・雄冬は絶壁が海にまで迫っていて、突端は風が激しく潮流も速いことから、船乗りからも西蝦夷地の三険として恐れられていました。

各地では海岸線沿いに短い道路はあっても、それらをつなぐ海岸道路はありませんでした。

■場所請負人が道路建設

今から約二百年前、この辺りが一時幕府が直接支配する土地となったことがあります。幕府はまず現在の高島から小樽付近までの道路の建設を、場所請負人らに命じて工事を分担させ、二年後には余市～岩内間の道路が開通しましたが、荷を積んだ馬が通れる程度のものでした。

■古平～余市間道路の建設

今から百五十年程前、余市場所の請負人であった林家が、モイレにあった運上屋からユウナイ（湯内＝豊浜町）までの山道を切り開きました。

それから十年余り後の安政四年（一八五七）になって、古平運上屋支配人の岡田半兵衛が、歌棄から沖村までの約九・八キロと、沖村から余市に向かって約十二キロの新しい道路を作りましたが、歌棄から沖村までは海岸道路ではなく山を越えて行き、この道路は明治のころまで使われていました。

■余市～積丹間道路の建設

余市場所請負人林長左衛門、同じく美国の岩田金蔵らも、自分の場所内の道路を私費をもって作り、余市から積丹の日司までの道路が開通しました。

北海道の名づけ親でもある松浦武四郎は後に、本の中で、「西海岸の険しいことは皆知っている。どんな至急の用事などがあっても、冬はもちろんのこと、春や夏の季節であっても、風波のあるときはその地に滞在しなければならないことがしばしばある。道路は、この地の急務であると前から思っていた。シャコタンを越え、古平からヨイチを越え、オタルナイまで、すべてその地の支配人により安政四年（一八五七）の秋に完成した。大変喜ばしいことである。」

この道路を、当時は西海岸道と呼んでいました。

歌棄～沖町間の山道図

＜百五十年程前の古平の絵図＞

高野名幸作さんの日記から

浜の世相を語る

【47】

＜大正八年＞

12／8　床の中から座敷の中を見ると、何もかも変わっているので、新しいよその家に泊まっているようだ、人間の一生にはいろいろなことがあるものだ、家の中を回って見たが、台所がもう少し広い方が良かったようだ、茶の間が少し暗いのが欠点だ、それと物置が欲しい、店は広く明るいので気が晴れ晴れする、奥座敷は明るく申し分ない、商品は急いで運び入れたので、どこから手をつけてよいか分からない、棚が広いので片付けるには便利だろう。

12／12　大工、建具屋が来て、棚の取り付けや建具の建てつけをしている、海はすごいほどの時化で、高島では漁船が遭難、漁夫十三人が溺死したという、寿都では汽船一隻が難破したという、夜、エビス講でボタ餅が出る。

12／22（佐渡旅行から帰る）古英丸が入港して、佐渡からの土産などが着いた、もち米三俵と、ほかに干し柿、みかんが籠に入って届いたが、二十日以上もかかって来たので半分は腐っていた、余市から刺網千二百間を買う客が来た、大破格の値段で勉強した。

12／23　今朝の寒さは近頃にない、仏間の水も茶の間の鉄瓶の水も凍っている、十時ころから吹雪いて来たが、島泊からカレ網、ロープの客が来る、薄利多売が何よりだ、この寒中でも来てくれる、客は実にありがたい、新聞によれば、本州方面では流行性感冒が流行してきたとのこと。

12／31　カレ網はみんな出た、めでたい大晦日を家族そろって迎えた、食後、二日の売り出しの支度などする、大正八年は実に記念すべき年だ、浜町町民は、五月の大火で災難にあったが気を落とさず立ち直った、わが家では半年のえびす倉での生活が続いたが、今年は厄払いをして、来るべき新年は幸多かれと祈る。

＜大正九年＞

1／1　いよいよ大正九年の春を迎えた、風もない静かな天気、朝のご馳走をいただき、西宮神社に参詣する、十時から学校の拝賀式に参列する、のち裁縫室で新年交礼会がある、参加者七十余名、終わって新地郷社に参詣、回礼をする、海は珍しいほどのナギ、末広丸一隻が満艦飾で停泊している、三時ころ帰ったが疲れた、明日の大売り出しの準備をする。

1／2　例年どおり正月二日の初売り、七時に開店する、呉服屋では朝のくじを無くしたせいか、朝早くからの騒ぎはなくなった、以前だと二時か三時ころから戸を叩かれて困ったものだった、手伝いの人も来て九百円ほどの売り上げがあった、網も高値のためか買い控えで、近年になくヒマな売り出しであった。

1／5　寒さも厳しいが、上ナギなので船はみんな出た、店は今が一年中で一番ヒマなときだ。

1／6　快晴で海は昨日に続いて上ナギ、夏のような青空である。漁師もゆっくり漁ができるだろう、夜、物産商組合の宴会が、新地の美登利で開かれた。

1／11　帳祝い（商店では新しい帳面をとじる、帳面を作ってそれを祝う）の日なので、餅の馳走がある、今年の商売繁盛を祈る。

1／12　本陣の浜から入船町にかけて、カレ網漁でずいぶん賑やかだ、暖かで海も静か、春先の鰊漁のころのようだ、こんな寒中も珍しいことだ、カレ網も二百貫から三百貫とれ、荷造りで忙しい、本州の送り先は安値で思わしくないとこぼしている。

（以下　次号）

断章小説【ふるさと遥か】第28編

偽善の構図

踏みにじられる青春群像

吉川義雄

「おいッ友野、何で俺が国の為に死ななァいかんのだ。教えてくれッ」

召集令状を、バシッと喫茶店のテーブルに叩きつけ、青白い顔の目だけ怒らせた中本が、他の客たちの耳目をまるで意に介さない突然の激情を見せて、友野をあわてさせた。

これから陸軍の営門をくぐるという数時間前だけに、友野も言うべき言葉を失ってしまった。

札幌の書店で小僧生活を共にし、十四歳から二十歳までの七年間、それまでのお互いの歓びも悲しみも知りつくしていた。

中本が店員奉公に来る少し前、彼の故郷函館市は烈風の中で大火となり、両親を一時に失っていた。気丈な彼は、悲劇の主人公みたいな顔も振る舞いもあまり見せることはなかった。そのことを知ってから、友野は自然に彼を庇う態度になり、二人で何でも話し合うようになっていた。

乳色のアカシヤの花が七回咲いて、七回散った。軍人がせいじの中心に座った国に、若者に安堵の場所なんか無い。

多くの女子店員の中から、二人ともひそかに好きな人を見つけ、その片想いを熱く語り合った。

早く召集されていた先輩格の中からは、余りにも早く戦死の知らせも届けられていた。トルストイと、ドストエフスキーの文学を熱心に彼らは語っていた小松先輩は、底抜けのヒョウキンな面もあって、みんなから慕われていた。

閉店後のひととき、寄宿舎に上る階段前には「われこそは」と気負う、十数人の若者たちが集まって来る。一段上るごとに一発放屁し、ガスの無くなるまでに何段上るかを競うものである。大抵、多くても七、八段でガス欠となるが、十三階段を遂に征服したのは小松先輩であった。その夜、鼻歌まじりで小松先輩は猿股を洗濯していた。

友野も召集されて霞ケ浦の航空隊にいたころ、珍しく、南洋群島の絵はがきに、中本からの「軍事郵便」が届いた。

このハガキが、彼からの最初で最後の便りであった。南方戦線にいるとばかり信じていた友野は、中本の戦死の地が遥か北のアリューシャン列島、アッツ島であったことを戦後になって知らされた。

宇宙は多彩な生命に満ちていると仏法は説く。ある日ある時、輝く青い地球に、自我の尊厳を秘めて生まれて来た「人間」としてのいのち。

父母を尊貴な縁とはするが、自らの因は否めないはず。必ず使命があってこの世に生まれて来たと、友野は考える。

前線で、多くの同年輩の特攻機を送り出す度に、靖国の言葉を引きつった顔で言われる光景を、友野はツバを吐く思いで耳にした。

人は「神」の奴隷ではないし、「仏」の家来でもない。むしろ宇宙から祝福されて、人類として生まれてきた。尊貴な生命を守護してこそ、神であり仏でならなければならない。

神を利用し、仏を卑下している人間の傲慢が、数知れぬ悲劇を生んでいるのだ。

深夜のテレビ放送がアフガン空爆を伝え、それ以前の、人間としての究極の悲劇とも言えるニューヨークのビル破壊の画面を繰り返しダブらせる。

友野たちが青春を愛ほしんだ日、耳にタコのできる程聞かされた「聖戦」という言葉が、またも繰り返し放送され出した。

（この稿終わり）

―古平いろはうた―

ね　霊場の岩場に残る観音像

鴨居木方面に通じる道路から泥の木川を二キロほどさかのぼったところに、二十メートルを超える滝のあることは、山で仕事をしている人たちや近くの住民には早くから知られていました。滝の周辺は四季折々の風景にも優れ、特に紅葉の季節には伝え聞いて訪れる人たちも多かったといいます。

禅源寺住職であった秋田岳轉和尚は、案内する人があってその泥の木川上流の通称・泥の木の滝へ足を運びました。

清流が流れ、滝の周囲は深い山々に囲まれて静寂に包まれ、渓谷と森林のつくりだす景観に目を見張りました。

岳轉和尚はこの泥の木川の水で、近年盛んになってきた造田地帯へ水利の便を図り豊作を願うと共に、この地に観音像を祀って霊場の建設を考えました。

最近、西部方面では丸山中腹に青峯観音堂が完成したことから、それに対してこの方面にも観音像を祀ることが、いっそう信仰を広めることになるという考えがあったからです。

大正十二年一月、たまたま皇族のご婚儀があることからそれを記念し、岳轉和尚が中心となっていた祝聖会という修養団体に図り、霊場建設が進められることになりました。

しかし、霊場の建設には土地や道路の問題がありましたが、観音像設置の土地については快く借用でき、霊場建設を歓迎する泥の木部落の人たちの協力を得て、踏み分け道の整備も進められました。

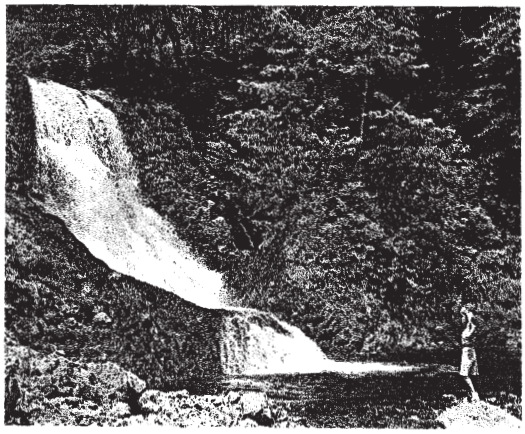
いよいよ準備も整って八月三十一日、天長節の佳き日を記念して観音像一体が祀られ『観音滝』の命名式が行われました。

観音滝霊場の建設に当たっては、町内外から千八十八人の賛同者と四百七十三円の寄付があり、後に小さな観音堂を建てその中に寄付者の氏名を書いて奉納することにしました。

大正十三年十月、いよいよ準備も整って待ち望んでいた入仏式が行われることになり、あいにくの小雨でしたが三百人を超える参詣人が霊場を埋めました。お堂の中に観音像を祀り、岳轉和尚の詠んだ歌を刻した石碑が建てられました。

古平の岸打つ波はみなかみの
観音滝へひびくなるらん

＜洞窟の中の観音像＞



＜夏の観音滝＞

以後、毎年この十月十七日を法要の日として、一般には観音祭りとして多くの町民に親しまれ、秋の紅葉を楽しむ人たちで賑わいました。

それから七、八年して、この霊場一帯に観音像を安置するという計画が持ち上がり、⇦♣

その昔リンゴで栄えていま団地

新政府の行政改革によって、明治二年七月に開拓使が置かれ、同年八月、蝦夷地が『北海道』と改称され、十一国・八十六郡が画定されました。古平郡は開拓使の直轄となったので、開拓使古平出張所が置かれることになり、本陣と名前を変えた元運上屋の建物がその役所となりました。

翌年、札幌に開拓使本庁舎が完成し、外国からの技術の導入などもあり北海道の開拓も次第に進展しました。

明治五年、アメリカから六百本程のリンゴ苗木が輸入され、古平にも配布されました。

当時、開拓使古平出張所は、今も本陣の町名が残っているチョペタン川河口付近にありましたので、まずその周辺に植えられたと考えられます。鰊漁を主体とした漁業が生活の中心でしたから、農業はその後の開拓団体が入植するまでは、家庭の自給程度のものだったでしょう。

その翌年、古平出張所に勤めていた関口利勝が退官し、古平川流域の開墾に着手しました。農地として一般の作物が作られましたが、その後、リンゴ栽培に好適な土地であったことや、リンゴが貴重なものとして有利な作物であることが認められ、現在の旭団地や栄町付近からパークゴルフ場周辺までの一帯がリンゴ畑に変わりました。

<高野名幸作さんのリンゴ園　大正六年九月撮影>

関口八郎さんは生前、「大正時代は、私の家の前から古平川の川岸まで一面リンゴ畑だった。」と言っておりました。

リンゴはチョペタンの沢・港町の丘陵・丸山の高台（ふるびら温泉付近から下）でも栽培されていて、明治四十三年の古平町治要覧によると、リンゴの生産高一、〇三〇、七四一斤（約六一四トン）、金額二〇、九一四円とあり、金額で農産物の約四六パーセントを占めていました。

しかし、大正時代の中ころになると、リンゴの病虫害による被害が広まったことや米価が上ったため水田への転換が増え、リンゴの栽培面積は次第に少なくなり、戦後ではチョペタンの石井さん　※

♣昭和六年から、西国札所三十三番にちなんで三十三体の観音像の建設が始まりました。

観音像は個人や団体などがそれぞれ建立し、お祭りには沿道に建ち並ぶ観音像に詣でながら観音滝へと向かうのです。滝を眺める高台付近には、岩をくり抜いて祀られている二体の観音像もあります。

戦後は次第に観音滝霊場へ参詣する人たちの足も遠のき、管理も十分に出来なくなったことから場所を禅源寺境内やその外に移す人が多くなり、現在は禅源寺境内に十一体が安置されております。十月十七日にはそれぞれの家族が集まり、住職の読経で法要を営み、また、観音滝でも住職や泥の木の人たちによって法要が行われております。

観音滝への道路は、この時期クマの出没はともかくとして、イタドリなどがじゃまですが車での通行は十分できます。何とか道路も整備して、景勝の地として復活してほしいものです。

（この観音滝の上流が古平町の水源地です）

鰊のまくり

町中が活気にあふれたころの鰊漁のことを知る人も、今では少なくなってきました。あんなに盛んだった鰊漁も、次第に忘れられていくんでしょうか。

鰊大漁の日が続くと、番屋の飯炊きは夜寝ることもできない程で、そんなときなど、三度三度のおかずを作るのも苦労します。鰊場の食事は、ご飯は沢山あっても一汁一菜に決まっていました。おかずにする鰊は沢山ありますが、いつも鰊ばかりでは飽きてしますますが、そこは鰊場のこと、調理にもいろいろと工夫があります。

下積みにされて鮮度が落ちたような鰊を、背中から開いて背骨を取り、身を内側にくるくると巻きます。それを昆布だしのとった鍋に入れ、青ねぎといっしょに塩味で煮るのです。鮮度が落ちているので少々は臭いますが、また、それが特別な味わいがあって、好物だと言う人もいます。

竹内コト

母は、この料理のことを『まくり』と言っていました。今でも「やぁ、あのまくり食いてぃなぁ」と言う人がいます。

しょうゆに漬けたら『かまくら』で、みそをつけたら『でんがく』というふうに、とにかく鰊の料理は沢山ありました。私はやはり、獲れたての鰊を塩ふりで食べるのが一番おいしく大好きです。

このごろはスーパーなどでも鰊を売っていますが、昔は『あぶら鰊』といって食べなかったようです。

※ や伊藤さん、高野名さんで栽培している程度でした。

現在は栽培農家は全く無く、僅かに家庭用として植えられている程度です。昔は、見渡す限りのリンゴ畑であったこの一帯も今は住宅地となり、町名も栄町として、リンゴで栄えた名残と今後の発展を祈念しているようです。

ぶらり寺の一人旅

室谷忠雄

室生寺と安産寺

近鉄大阪線室生口大野駅から約七キロ、奈良交通のバスで十五分程走ると室生寺というバス停があり、降りるとすぐ前が女人高野で有名な室生寺です。昔は女は不浄なものとして高野山では女人禁制の制度があったのですが、室生寺は古くから女性にも開放された真言宗の寺で、女人高野と呼ばれています。

室生寺を拝観するのであれば、数ある仏像の中で釈迦如来と地蔵菩薩の立像が有名です。

戻って、大野駅から電車でひとつ隣、三重県寄りの三本松という駅の北口で降りると、目と鼻の先に安産寺という寺があります。見たところ、寺というより公民館といったような建物ですが、この裏手に、鉄筋造りの物置風の建物があります。これが安産寺です。

私は、この中に安置されている子安地蔵を初めて見たときに「アッ」と驚きました。実は彫刻なのですが、室生寺の釈迦如来とこの子安地蔵の納衣が全く同じようなものだったのです。

おそらく同じ工房で、同じ職人によって作られたものだということは素人の私にも分かりますが、彫られた時代も同じ平安時代ということです。

それともうひとつ驚いたことには、室生寺の地蔵菩薩の光背は、この子安地蔵から外したものをつけているのだそうです。

同じ時代に造られ、姿も、納衣も、工房も、職人もすべてが同じなのにもかかわらず、室生寺の釈迦如来は国宝で、安産寺の子安地蔵菩薩は重要文化財なのです。どうしても、なぜ？という疑問が残ってしまった一件でした。

北海道・樺太・千島を探険
最上徳内 蝦夷草紙 を読んでみましょう
〈16〉

文字を教える

私は天明六年（一七八六）の夏、蝦夷の島々を巡行することになったが、蝦夷の中に私一人だけで、通辞はいたがあまり頼りにならず言葉が何かと不自由であった。

フリウエンと言う若い蝦夷がいたが、多少の日本語が分かるので私の手元において連れ歩いていた。ある時、この蝦夷が文字を学びたいというので片かなのイロハを教えたところ、大分覚えてから、この文字はどういう意味で、どうすればあらゆる言葉に通じるようになるかと聞くので、わが国の弘法大師という偉いお坊さんが作られたもので、その意味は私もよく知らない。しかし、このイロハ四十八文字を学べば一切の言葉を書きつづることができ、これで書き表せない言葉はないというと、それは奇妙なことだという。それからはどうしたのか学ぶことに精を出さなくなったので、懲らしめのため叱りつけた。私を師と頼んだからにはお前はわが子同然であり、ぐうたらな子を持つのは親の恥である。蝦夷には文字がないので、お前が文字を覚えれば周りの人から重宝だとうらやましがられ、蝦夷にとっても益のあることである。ここで止めるのはお前はもちろん、私にまで恥をかかせることになるのだと言い含めると大いに感じ、それからは以前にも増して精を出すようになった。

また、その時に彼は言った。私は日本の風俗を好んでいるが、生来の蝦夷であるので覚えることには鈍感であるので、これに免じて今までのことを許して下さいと詫びた。私もこの言葉を聞いて、蝦夷を卑下していたような自分を反省し、このような志を持ちながらふびんな境遇を思い、感涙に堪えなかった。

彼はついにかなづかいも覚え、強く私を慕うようになりなおふびんさがつのった。

松前に帰ることになり、彼を連れて途中箱館村まで来たときのこと、宿をとった白鳥新十郎宅で紙に文字を書かせて見せたところ、これはまさに前代未聞のことと白鳥家では驚き、盛んに彼をほめたたえた。

その後私は、蝦夷に文字を教えたということで松前藩から不興をかったが、これは誠にくやしく残念なことであった。

【注】文字＝蝦夷には文字がなく、なわを結んだり、木に刻みをつけて記憶の補助とした。ものを数えるにも、それぞれの家で独特の方法があった。

歌の文句のこと

西蝦夷ソウヤ（宗谷）辺りで、アイヌの人たちの座興に、口に糸をくわえてそれを爪でひき、それに団扇（うちわ）や太鼓のようなものを打ち、囃子（はやし）に合わせて歌う。その歌の意味を訳してみよう。

［蝦夷の国が始めて開けた時、十二一重（じゅうにひとえ）の美しい服を着た神と、ただ一枚の粗末な服を着た神が天下りした時に、美しい服を着た神を尊く思い、この国に留まり給えと尊敬し、粗服を着た神を尊敬しなかった。それでこの神は天に昇ってしまい、美しい服を着た神は、そのままこの国に留まられた。この神は粟（アワ）稗（ヒエ）の神で、天に昇られたのは米穀の神であった。蝦夷は酷寒の地であるので、十二一重の神にこの国に留まり給えと祈ったが、粟、稗の神とも知らず、単衣（ひとえ）の神は米の神とも知らず、夷狄（いてき＝古い中

国の思想で、未開人・野蛮人を意味する言葉）であることがあさましい。この蝦夷地に米ができないのも道理である」

アイヌの人たちは夷狄（いてき）と言われることを恥と思っている。日本に大いに好意を持っているので、教化するならば良民となれる今の時勢である。

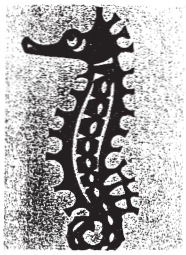
漁猟のこと

天明六年（一七八六）、下蝦夷地のニシベツ（西別）という所で、御試交易（おためしこうえき＝幕府と交易する請負人を交代させた）として鮭の塩引きを作ったことがある。このため江戸本町にある苫屋久兵衛の持船で八百石の神通丸が、太兵衛を船頭として松前に到着し、それから鮭積み取りのためニシベツに向かった。

水先案内として、松前唐津内町の次郎兵衛という者が乗り組んだ。彼は永年蝦夷地で商売をし、鮭の塩引きについても経験があり、私も同船して、八月中旬ニシベツに到着した。

ここは秋の彼岸になると鮭の寄る所で、八月一七日には一枚の網に二、三〇尾ばかりが掛かる。翌一八日朝は彼岸の入りで、一回の引き上げた網には悪い鮭を棄てても九七束あった。一束というのは二〇尾なので、一九四〇尾ほどは獲ったことになる。私の見たところでは、すべてを数えると一五〇〇尾は下らないと思われる。たちまちにして八〇〇石ほどを積み込み神通丸は出帆した。

私は猟場を検分するため、山を三日旅してアッケシに出た。途中、山間の川を見ると鮭が沢山上って来て、水面からあふれんばかりで実に目を驚かした。こんなことはごく普通のことだとアイヌたちは言っていた。



俳句　古平ホトトギス会

栗を食むリスの仕草見て飽きず　斉藤波留
御僧の経に合わすや蟲斯　山口悦子
寝んとして耳をすませば虫鳴けり　越野敏雄
波荒き宗谷沖なる烏賊釣灯　大和田絵伊
遠山の姿くっきり秋深む　福井幸平
トンボーの古平橋を渡りゆき　関口勝志
訪れてたちまち暮るゝ日短か　よしざき　り
のまれゆくはきいずる人夏の駅　仲谷比呂古
薫風の過ぎ一湾の波平ら　越野清治
夕凪の丸山岬秋に入る　室谷弘子
荒れ庭に凛としている野紺菊　泉　清三
嘘泣きのまゝごとの子よ風光る　中村樺宵

編集雑記

▽六枚つづりのカレンダーもとうとう最後の一枚になり、小春日和が続きましたが二三日は二十四節気の「霜降＝そうこう」で、やはり季節は確実に移っていくようです。

▽文化祭展示会で、昭和四四年、北洋方面へ出漁する漁船団の勇姿を撮影した服部昇司さんの遺作を展示しましたが、「懐かしい写真だネ」と大変好評でした。

▽今月号は文化祭の人出を見込んで、一〇〇部多い六五〇部を印刷しましたが、売れ行きの方はどうでしょう。多くの方に読んでほしいと願っております。　カゼに注意、ご健康でお過ごし下さい。